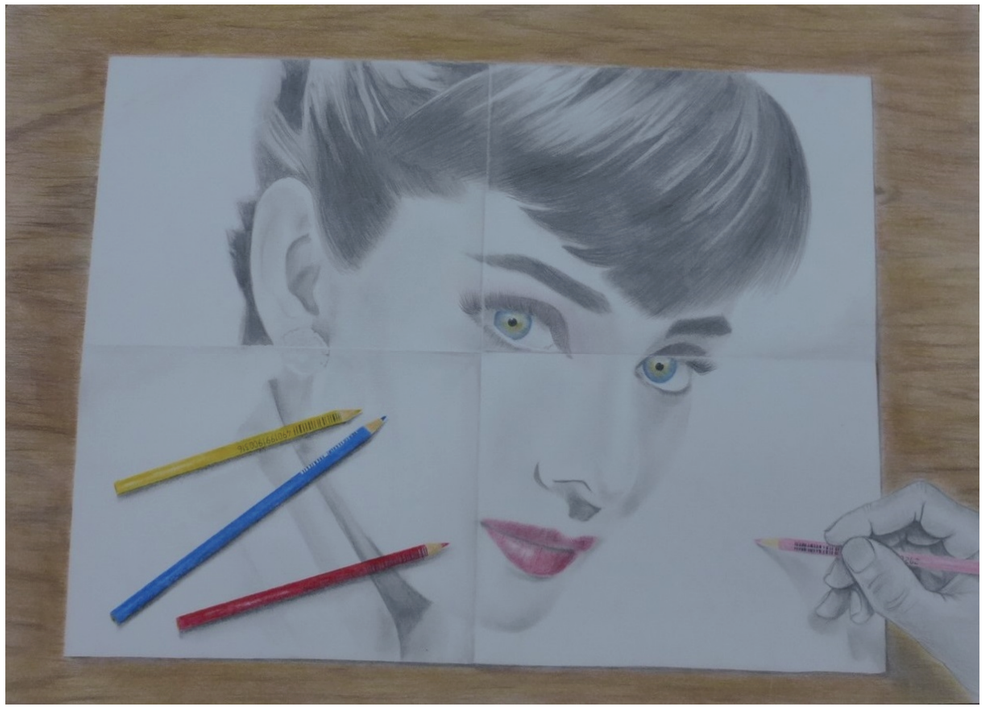
みちのく

成人編

－第４０号－



令和元年度刊
仙台矯正管区

みちのく
成人編
第四十号
仙台矯正管区

刊行のことば

本誌は、昭和五十六年の創刊号以来毎年刊行し、本号で四十号を数えております。

当管区では、今年度から従来の「東北ブロック書画コンクール」に文芸部門を加えて「みちのく書画文芸コンクール」を開催することとしました。本誌には、同コンクールに応募した、当管区管内刑事施設の受刑者の書画作品及び文芸作品のうち、各分野で御活躍の先生方の審査により入賞した作品を掲載いたしましたので、ご覧ください。

令和二年三月

表紙の題字は久道石静氏の揮毫によるものです。

編集後記

本年度から、みちのく書画文芸コンクールとして書画作品及び文芸作品の応募を募りましたところ、各施設からこれまでと変わりなく多数の作品が寄せられ、本書画文芸作品集の発刊の運びとなりました。

文芸作品については、御審査を賜りました先生方の多大なるご協力のもと、本年度から新たに、各分野において金賞、銀賞、銅賞及び佳作作品を選定することが叶いました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

「みちのく」成人編第４０号
令和２年３月発行

編集発行　仙台矯正管区第三部
〒984-0825　仙台市若林区古城３－２３－１
TEL　０２２－２８６－０１７８

目　次

【文芸部門入賞作品】
作文・・・・・・・・・・・・・・・・2
【選評】原田勇男 先生
詩苑・・・・・・・・・・・・・・・・15
【選評】原田勇男 先生
歌壇・・・・・・・・・・・・・・・・21
【選評】伊藤久子 先生
俳壇・・・・・・・・・・・・・・・・26
【選評】鈴木三山 先生
柳壇・・・・・・・・・・・・・・・・30
【選評】佐藤岩男 先生

【書画部門入賞作品】
絵画・・・・・・・・・・・・・・・・33
【選評】鈴木智枝 先生
ポスター・カレンダー・・・・・・・・37
【選評】鈴木智枝 先生
毛筆・・・・・・・・・・・・・・・・39
【選評】鈴木霽月 先生
硬筆・・・・・・・・・・・・・・・・43
【選評】鈴木霽月 先生
書画部門審査総評・・・・・・・・・・46

《作　文》

金賞

ゴルフから学ぶ人生

青森刑務所　鳴寂

その瞬間、彼女はパターを高々と天に突き上げた。溢れたものは涙ではなく、とびきり満開の笑顔だった。

令和元年八月五日、英国から全世界に快挙が報道された。「世界初のシンデレラ」と銘打たれた翌日の新聞は、ＬＰＧＡツアー初戦で初勝利、樋口久子以来四十二年振りの快挙達成、そして「スマイルシンデレラ」と、祝福の言葉で埋め尽くされていた。

主役の名は渋野日向子。今をときめく黄金世代の一人として、二度目の受験でプロテストに合格、ＱＴランク四十位の成績で二〇一九年前半戦のみの出場権を得た。しかし、ゴルフの試合は正に「試し合い」。今日を生き残る為死力を尽くす。開幕から最終戦までの三十数試合を戦い、獲得賞金上位五十名が、翌年度のシード権を得ることになるのだ。

例えば、あの人は何かを「持っている」という表現があるが、今考えてみても、やはり彼女は「持っていた」のだ。まずゴルファーは、毎試合戦いながら翌年度のシードを目指す。女子プロの場合は、獲得賞金二三〇〇万円がシード獲得のボーダーラインになる。しかし、彼女の場合は前半戦のみの出場しかできないので、前半戦である程度の賞金を獲得しないと後半戦の出場が叶わない。それはイコール翌年度のシード獲得への赤信号となる。しかし・・・全英制覇の三ヶ月前に、彼女は既に快挙を成し遂げている。

元号が令和となった五月二週目、国内女子メジャー大会であるワールドレディースサロンパスカップで、トータル十二アンダー、何とプロ初勝利が国内メジャー、そしてメジャー優勝者に与えられる翌年度からの三年シードを獲得したのだ。勢いそのままに、二ヵ月後の七月には、新設された第一回資生堂アネッサレディースでプレーオフを制し二勝目、疾風怒濤の勢いで、黄金世代の顔となった。

今、日本女子ツアー開幕前の二月のゴルフ雑誌を数冊手にしている。どこを探しても、期待の若手として渋野日向子は紹介されていない。それが、開幕して半年で日英メジャーを含む三勝・・・正に人生は予測不可能、しかし、未来への前進は大いに可能なのだということを、教えてくれているのだ。

私は四十七歳で初めてドライバーを握った。ゴルフ暦は三年。当時住んでいた東京Ｃ市にショートコースを九ホール備えたスポーツパークがあった事から、シングルの知人にスイングの教えを請い、週に四日コースに通った。空振り、ザックリ（地面にクラブが刺さる）、当たった！しかしスライス、そしてフック。そして、ついにあの瞬間が訪れる。ゴルフボールがまるで夕陽に吸い込まれるように、真っ直ぐに天高く飛び立ったのだ。あの時の感触は一生忘れる事は無い。とは言え所詮素人。真っ直ぐに飛ぶのは十球に一球程度。本当に思い通りにいかないのがゴルフ。恋愛で言えばひたすらフラれ続けるようなもの。あきらめれば楽になるけれど、それでも焦がれ続けているとある時ちょっとだけ振り返って微笑みかけてくれる。その瞬間があるから、また焦がれ続けられるのかも知れない。私の人生に於いて、最も輝いていた日々だろう。

よくゴルフは人生の縮図だと言われる。人は泣いて笑って成長し、前進し、時に後退もしながら、失敗も成功も糧にして歩み続ける。ゴルフもまた然り。ライバルとの戦いではあるけれど、最終的には自分自身との闘いだ。例えキャディーにアドバイスをもらっても、次の一打を打つのは自分自身、全ての責任は自身にある。しかし、プロと言えどもショットやアプローチを一定の場所に打ち続けるのは至難の技。雨にも風にも体調にも、そして運にも左右される。フェアウェイ（良好な芝部分）ばかりではない。深いラフ（雑草の繁った場所）にも、バンカー（砂の窪み）にも球は転がり、時には池に、そしてＯＢも。

人にはそれぞれに、自分自身を見つめ直すきっかけというものがあるのではないか。思えば私の人生にも喜びや悲しみがあり、出会いや別れ、良い時も悪い時も確かにそこに自身が歩んで来た道はあった。しかし、他人を顧みる事無く、自身を見つめ直す事も無く、再び過ちを犯した。恥ずかしながら、私はゴルフの真の難しさを知ってから、

現在の服役生活を送っている。ほんの少しでもゴルフを知った事で、この環境下でも学べることがあるという事を私は知り、思わず心を、そして体を震わせたのだ。ある夏の日の出来事だった。

私は一冊のゴルフ雑誌を手にしていた。読み進めていくと、ふとあるページに目が留まった。そこには「塀の中の懲りないゴルファー」とあり、興味を引かれた私は貪るようにその物語を読み始めた。

ブラームス・・・あの偉大なる音楽家ではない。物語の主役は、米コネチカットの法律事務所の助手である。彼はある日、男女間のトラブルに巻き込まれ発砲、相手は一命を取り止めたものの、彼には十二年の懲役が宣告され、州刑務所に収監された。ある日、彼はゴルフに関する映画を見た事により異様な興味を抱く。早速外部よりゴルフ書籍ばかりを差し入れしてもらい、毎晩就寝まで読書に励む。そして、ある日彼は所長であるネイサンに、アイアンの差し入れを許可して欲しい旨の請願を出した。所長は怒り、即日却下した。「でも私はゴルフをしてみたい」「結構な話だ。私もゴルフは嫌いじゃない。ただお前さんは肝心な事を忘れている。ここは刑務所であり、お前さんは囚人なんだ」ブラームスはそれでも懲りずに数十回の請願を繰り返した。

数ヶ月後、州の副知事が刑務所にやって来て、「空いている檻の中で運動時間の三十分だけクラブを振らせればいい」と一言。いかにもアメリカ的な話である。次の日からブラームスは一心不乱にスイングを繰り返した。しかし、いくら本を読んだところで、実際のスイングは実にぎこちない。結局、業を煮やしたネイサンがアドバイスをする事になる。

そして五年後、仮釈放を前にしたブラームスを所内の農園に伴い、実際に球を打たせてみた。見事だった。一五〇ヤード先の細い畝の上にピタリと白球の山が築かれたのだった。

出所の日、ネイサンは愛用のパターをプレゼントした。パッティングだけは施設の保安上の理由から教える事が叶わなかったが、しっかりと彼の手を握り、未来に栄光あれと祈り、その背中を見送った。

一年後の一九六六年五月、彼はイースタン・アトランティックアマに出場し十五位タイ、そして翌年の全米オープンの予選のまた予選に出場、そして同年の全米アマの予選に出場し、たった一打及ばず涙を飲んだ。しかし恐るべきは、彼は実戦ラウンドのできない刑務所でスイングを勉強し、出所してから僅か二年弱で見事なアマ選手になった事だ。

ネイサンは時間の許す限り、彼の応援に出かけた。おそらく彼は世界でたった一人の、〝刑務所カントリー〟の出身者だから。一九六八年五月、近くのコースで試合があると聞き、彼は家内と応援に駆けつけた。すると、ボード内の〝C・ブラームス〟が二本線で消えている。彼は係員に何故ブラームスは欠場したのかと尋ねた。すると係員は、「あの選手は来ないよ。ゆうべ近くの道路で事故に巻き込まれたのさ」と。ネイサンは目の前が真っ暗になり、近くの木立ちの中にうずくまり、このまま死ぬまで泣いていようと思った。

私は・・・泣いた。彼の死を自業自得と笑う人がいるだろうか？夢に描いた自分に近付く為に、努力し続けた彼の生き方を否定する人はいない筈だ。私は、所内でブラームスが書いた日記の言葉を、一生涯忘れないだろう。

「私は人生で取り返しのつかないミスをした。取り返すことは絶対に不可能だけど、元に戻すことは絶対にできないけれど、それでも一生かけてリカバリーしようと思う。私がこの場所にいるのは、それが私の置かれたライ（球の置かれた場所＝人生）だからだ。すべての人には置かれたライがある。ラフやバンカー、池に落ちてもOBでも、そのライを変える事はできない。ならば精一杯プレーを続けるしかない。命ある限り、次の一打を。命ある限り、目の前の一打を・・・」

「持っている」のは渋野選手やブラームスに限らない。人はそれぞれに必ず何かを「持っている」のだから。そして、それぞれの物語を紡ぎ出す、一人一人が主人公なのだから。

私は、ブラームスの言葉を心に刻み、もう一度大海に出ようと思う。過去のライも、未来のライも、すべてを受け入れよう。今は精一杯次の一打を、心から磨かねばならぬ。ドライバーで一直線という訳にはいかないけれど、刻んでグリーンへ。未来への前進は大いに可能なのだという事を忘れずに、羽ばたいてみせよう。羽を千切れんばかりにはためかせて飛ぶトンボのように・・・。

銀賞

風の少年

福島刑務所　Y・T

向日葵が雨に濡れていた。白い洋風の電話ボックスにも水滴が張りついている。

亘がその存在を知ったのは受刑中のことだった。東日本大震災から何年目かの特集番組でレポーターが訪れていた。以来、亘の心の中に棲み続けている。

実際に亘がそこに足を運んだのは、四年という刑期が終了してからだ。震災から相当な歳月が過ぎ、表面的には人々に笑顔が戻ったように思われた頃だった。

レンタカーで東北の海沿いを走っていると未だに地震と津波の爪痕が、そこかしこに残っている。復興工事が進み、巨大な起重機が目につく一方で、被害が剥き出しのままの家屋や、更地にされたまま手付かずのかつては賑わっていたであろう一角。離れた場所で生活していると風化しつつあるが、被災地、被災者にとっては、まだ震災は続いているという現実を目の当たりにした思いだった。

目指す場所は海を見下ろす丘の斜面にあった。辺りには夏草が生い茂っているが、そこだけ何種かの夏の花が咲くガーデンになっている。その中心に電話ボックスがあった。白い三角屋根にガラス張り、傍らには木のベンチ。向日葵やマリーゴールドが色鮮やかだ。

亘はいつかの番組を思い出した。

『風の電話』・・・震災で家族や友人、大切な人を突然失った人が想いを呟けるようにと、この土地の主が設置しました。ボックス内には電話線のない黒電話とノートがあります・・・。

今でも変わらないのだろう。ガラスの箱の中に黒電話が見える。入室者はいない。

雨が上がったようだ。ふと、一人の少年の姿が目に入った。ボックスに入るでもない。ベンチに座るでもない。ただ、何らかの意志を持って、そこにいるような気はした。

半袖Tシャツにズボン。坊主頭にあどけなさの残る顔は日焼けしている。中学生か、高校生だろうか。

亘が視線をさまよわせていると、不意に少年の視線とぶつかった。

「兄ちゃんも電話しに来たの？」

訛りを含んだ声は人懐っこさが感じられた。

「ん？いや・・・そういう訳じゃ・・・」

「なんだ、冷やかしか」

「いや、そういうんでもないけど」

ただの興味本位なんかではない。かと言って、被災者と関わりもない。亘は返答に困惑して曖昧に言葉を濁した。

「ふーん」

納得したのか定かではないが、少年は亘の隣まで歩み寄って来た。

「君は？」

「俺は毎日、母ちゃんと話しに来るんだ」

道路脇に自転車が駐められているから、それに乗って来たのだろう。

「そうか。お母さんは・・・その・・・あの・・・」

「震災で死んだ。津波に呑み込まれた。まだ見つかってない」

どう口にしていいか戸惑う亘に対し、少年は実にあっけらかんと事実を語った。

「大変だったな。いつもどんな話を？」

「何？何？兄ちゃん、新聞記者？取材でもしているの？」

ここで初めて少年は笑った。

「違う、違う。悪いこと聞いちゃったな」

「嘘、嘘。いいよ。俺も誰かと話したかったし。にしても、大人って皆、そんな顔になるんだなぁ」

今度はさっきより目が垂れ下がった。

少年によると、最初はここに来るだけで泣けたらしい。何を言っても、何を聞いても、受話器の向こうに聴こえるのは、風と波の音だけ。何度呼びかけても、名前を呼んでももらえない。

「でもある時、風の音が母ちゃんの笑い声に思えたんだ。波の音は母ちゃんの泣き声。そうなってくると、咲いてる花が母ちゃんの顔に見えたり。あっ、バカらしいって顔だぁ」

照れ隠しなのか、少年は膨れっ面を作った。

「本気で聞いてるって。でも、じゃあ、ここに来たら、お母さんに逢えるって訳か」

「うん。俺はそう思ってんだ。だからその日あった事を母ちゃんに報告しに来てるんだ。はい、じゃあ、次は兄ちゃんの番」

そう言って少年は亘にマイクを向ける仕草をした。「兄ちゃんは誰に逢いたかったの？」

「俺も・・・母ちゃんかな」
自分でも驚く程、率直に言葉が出た。
「死んじゃったの？」
「多分、生きていると思う。けど、逢えなくなったんだ」
少年はじっと亘から視線を外さないでいる。どこまでも澄んだ目だ。
「兄ちゃん。母ちゃんと最後にした会話って憶えてる？」
最後の会話・・・何だったっけなぁ・・・。
あの頃、実家で暮らすのが苦痛で仕方なかった。ある事件で逮捕され、保護観察付きの執行猶予判決を受けた。倉庫内仕分け作業の職に就き、親元で生活し始めてはみたものの一ヵ月もしないうちに仕事も休みがちになり母親との諍いが絶えなくなった。ついには、もう帰らないと決意し、仕事に行くふりで家を飛び出した。結果、昔の仲間とつるむしか術のなかった亘は、再度、逮捕された。
あれから何年経ったのか。
刑事にも弁護士にも刑務所でも、何度となく母親に連絡するよう助言を受けた。だが、亘は頑なに拒んだ。今更、連絡はできない。そんな資格はない。向こうも愛想を尽かしてるに決まってらぁ。
そう思いながらも、刑務所という隔絶された場所だと気持ちが弱くなるのか、「風の電話」に引きつけられた。受話器を通して母親を感じられそうな気がした。侘びる想いが届きそうな気がした。幻想だ、まやかしだと嘲笑う反面、「風の電話」に縋りたかった。「風の電話」に希う自分がいた。
最後の会話は思い出せなかった。きっと何てことないありふれたものだったのだろう。
亘がそう告げると、少年は短く頷いたあと語り出した。
「俺と母ちゃんの最後の会話、何だったと思う？俺はまだ小学一年だったんだけど、前の日に母ちゃんと喧嘩したんだ。その時にさ、『母ちゃんなんて大嫌いだ。いなくなれ』って言っちゃった。次の朝、『いってらっしゃい』を言ってくれたのに返事もしないでドアを閉めた。その日、津波が来たんだ」
携帯には今もメールが残っているという。
〈大丈夫？安全な所にいる？〉
〈俺は大丈夫。母ちゃんは？早く逃げて〉
少年のメールに返信はなかったらしい。
「どれくらい後悔したか分かる？」
少年がぼそっと放った一言が、亘の心奥深くを抉った。
「どうしてあんなこと言っちゃったんだろうって。でも、いつものことだった。憎まれ口を叩いても、何日かしたら仲直りして。いつもそうだったもん。まさか、そのいつもが失くなるなんてさ。だから母ちゃんにごめんって言ってるんだ。あの日言えなかった、ただいまもここに来る度に言ってる。兄ちゃんの母ちゃんは生きているんだよね？」
少年はもどかしそうに唇を噛んだ。
「分かってるよ。でも今まで散々苦労かけておいて、どんな顔して会える？そんな勇気なんてないよ」
「どんな顔だっていいべ。ごめんなさいって顔でいいべ。それに親に会うのに勇気なんて要るのかな。あっ、でも、俺も勇気がなかったから、こんなに悔やんでいるんだろうな。けど、こんな後悔に比べたら、その勇気なんてちっぽけだよ。ごめん、生意気言って。ただ失くしてからじゃ手遅れなんだって」
立ち上がった少年は歩き出し、サドルに跨った。一瞬、振り返ったが、そのままペダルを漕いだ。どんどん加速していく。やがて背中も見えなくなった。少年と座っていたベンチには風が戦ぐだけだ。
蟠っていた胸の内が軽くなった気がする。
家に帰ろう。謝りに帰ろう。真っ当に生きる覚悟を伝えに帰ろう。
少年の言葉がリフレインする。
どんな顔だっていいんだよな。愚かな人間でした。弱い人間でしたって顔でいいんだよな。でもこれからは違うって言えばいい。
風の向こうに消えた少年。亘とよく似た意地っ張りな少年。そう広くはないその背中に背負い切れぬ程の後悔が報われる時があるなら、それが少年にとっての復興なのだろう。
不意に記憶の扉が開いた。
「晩ごはん何がいい？」
対して亘は「何でもいい」と返した。それが最後だった。あれからずい分経つ。
無性に母の味噌汁が恋しくなった。甘い玉子焼きが恋しくなった。腹がぐうっと鳴った。

銅賞

願いの歌

山形刑務所　九州男

騒しい街も、終電の時間を過ぎれば多少は静かになる。冬の冷たい風が、少なくなった行き交う人々の背を丸くする。

忘れ去られた思い出みたいに、どこか寂しくなった街の広場。遠くで酔っ払いの声が響き、暇を持て余した若い奴らがゲラゲラ笑っている。そんな時間に、僕はようやく動き始める。

黒いギターを肩に掛けて、広場の片隅に立ちチューニングを合わせる。和音を奏でるギターに合わせて歌い始めると、いきなり歌ったからなのか、少し声がかすれて音程が外れた。でも僕は気にせずに歌い続ける。どうせ周りの人達の中に、僕の声が聞こえる人なんて滅多に居ない。

でも、そんな僕の声を聞いて、たまに足を止める人が居る。それは、スーツを着たおじさんだったり、作業着姿の若者だったり、まだ少し幼さの残る女子高生だったりと色々だけど、皆共通して暗く沈んだ目をして僕を見て来る。そんな人に会った時、僕は少しでもその人達の心が晴れますようにと、行き先を見付けられますようにと願いを込めて歌う。

この日も歌い始めてしばらくすると、一人の少年が僕の前で立ち止まった。まだ小学校一・二年生位の少年は、少し右足を引きずるようにとぼとぼ歩いて来ると、生気の無い暗い目で僕を見た。

「どうしたの？」

少年は答える事をためらうように、俯いてしまった。少しだけ見えた少年の顔には、いたる所に殴られたような青黒いアザが出来ていて、その細い首には大人の手で締められたような痛々しい跡があった。

少しだけギターを鳴らす。少年の悲しい記憶が、僕の中に流れ込む。

「そっか・・・。辛かったね。」

「僕・・・これからどうなるの？どうすればいいの？・・・パパとママは・・・どうなるの？」

少年が無表情の暗い顔を僕に向ける。僕は少し考えると、少年に笑い掛けた。

「とりあえず、一緒に歌おっか。お兄ちゃん何でも歌えるからさ。」

すると少年は、少しだけ目を見開きそのまま俯くと、小さな弱々しい声でアニメのテーマソングを口ずさみ始めた。

僕もその小さな声に合わせてギターを弾いて歌い出した。小さかった少年の声は少しずつ大きくなり、表情にも少しずつ明るい色が戻り始める。

アップテンポなリズムで弦を弾き、まだ少し暗い少年を導くように明るく笑って歌う。

僕のバカみたいな明るさに、ようやく少年も笑い返してくれるようになった頃に、曲がエンディングを迎えた。

少年と目が合う。少し恥ずかしそうに、はにかんだ顔が可愛らしかった。

「心は晴れた？」

そう聞くと少年は、ゆっくりと頷いた。

「お兄ちゃん、ありがとう。お兄ちゃんの歌のおかげで、僕がこれからどうすればいいのか・・・どこに行けばいいのか・・・分かった。」

「そっか・・・。良かったね。」

お互いはほほ笑み合うと、少年の顔が少しだけ悲しそうな表情に変わった。

「僕、もう行くね。僕はここに居ちゃいけないから。」

少年はそう言って僕に背を向けると、一度だけ笑って振り返り、消えて行った。

僕は、消えて行く小さな背中を黙って見送った。季節外れの優しい風が流れて行った。

それから僕は、また一人で歌い続けた。すっかり深夜になり静まり返った街に、僕の声だけが冷たい夜空に広がって行く。

夜明前頃に、今度は俯きながら歩いていた一人の女性が僕の前で立ち止まり、ゆっくり顔を上げると、闇に覆われたような暗い目で僕を見て来た。

「何か聞きたい歌、ありますか？」

そう尋ねた僕を、その女性は生気の無い顔でじっと見詰めたまま、

「許せない、許せない、許せない・・・。」

と何度も繰り返しつぶやく。これはかなりの重症だな、と僕は少し気を引き締めた。

「何が許せないの？」

「私を裏切った・・・。私を捨てたあの人・・・。」

「そっか・・・。」

暗く弱々しい声で女性はそういうと、またさっきと同じように長い髪で顔を隠すように俯き、許

せない・・・と言う言葉を繰り返し始めた。
「でも、幸せだった時もあったでしょ？」
僕の声に女性が小さく反応した。過去を思い出しているのか、黙って俯く女性に僕はゆっくりと言葉を続けた。
「幸せだった時間まで恨んじゃったら、悲しみだけしか残らないよ。」
「・・・あなたに何が分かるのよ・・・。」
震える声が、僕の心を締め付ける。
「何も知らないあんたに、私の辛さなんて分かる訳無いでしょ。」
僕を睨みながら、女性が吐き捨てた。
僕はその視線を正面で受け止めて、それでも優しく女性に笑い掛けた。
「うん。何も分からない。でもね、あなたがこのまま過去に縛られて全てを恨んだままだと、あなたが前に進めないのは分かるよ。」
「前になんて・・・もう進める訳ないじゃない。」
「そんな事ないよ。」
「ふざけないで！」
女性の全身から冷たい声が響いた。俯いたままで僕を睨み付ける目から、強烈な負の感情があふれて僕を包む。
僕はゆっくりと息を吐くと、大丈夫だよ、と明るく言った。
「大丈夫。前に進めるよ。あなたが自分を捨てた人を恨む気持ちや、悲しみや辛さ・・・、全部は分かってやれないけど、僕はあなたの幸せを願う事が出来るから。」
「私の・・・幸せなんて・・・。」
女性が言葉を探している内に、僕はギターを弾き始めた。左手でCのコードを押さえ、右手でゆっくりとアルペジオで弦を弾く。
女性の中の思い出が、少しずつ、僕の中に流れ込んで来る。
子供の頃の小さな女性が、両親に手を引かれて、優しい光の中を歩いている。
友人の女の子達と海ではしゃいでいる女性の姿。明るい笑顔が眩しく光っている。
高校の卒業式なのか、胸に白い花を付けた女性が、友人達と肩を寄せ合って写真を撮っている。
そして社会人になった女性は、一人の男と出会い、幸せそうに二人で街を歩いていた。
しかしその男には家庭があった。それに気付いた時には、一人の体じゃ無くなっていた。それを知った男は豹変した。優しかった男が嘘のように、暴力を振るうようになった。それでも女性は、男の事が好きだった。男の事を愛し続けた。いつか男が女性に言った、
「必ず妻とは別れる。お前だけを愛してる。信じてくれ。」
と言う都合の良い嘘を信じ続けた。
でも、それにも限界があった。男への想いが強ければ強い程、いつしかその想いは裏返り、男への強い恨み、憎しみに変わって行った。
そして女性は、ついに自らの命を絶った。
誰もが知っているラブソングを歌う僕を、女性がじっと見詰めていた。その目に宿っていた強烈な黒い影が少しずつ取れて行く。
僕は一つ一つの言葉に、
「大丈夫。あなたは前に進める。」
と言う想いを乗せて女性の心へと届けた。
歌い終わると、女性の目から一粒の涙が流れた。美しく輝く涙だった。
「あなたの過去は確かに辛くて悲しい事もあったけど、それが全てじゃないよ。」
女性がゆっくりと、噛み締めるように頷いた。そして僕を見ると、それまでと違った優しいまなざしでほほ笑み、
「ありがとう。」
とつぶやいた。女性の体がゆっくりと夜の闇の中に溶けて行く。その背後から、群青に染まり始めた空に朝日が差した。
これで今日の、僕の時間が終わる。
歌で救える物なんて、ほんの一握りの物かもしれない。それでも僕は歌い続ける。歌で誰かを救う事で、僕も歌に救われているのだから。それに、誰にも死んでまで自分の人生や、誰かを恨んで欲しくないから。
朝日の中に消えて行く体を見ながら、今日出会った二人の幸せと、ほんの少しだけ自分自身の成仏を太陽に願ってみる。
そしてまた明日の夜、僕は歌を歌う。この世に未練を残し、心に闇を抱えて夜をさ迷う者達のために。

佳作

令和に両親を偲ぶ

宮城刑務所　H・N

平成31年4月30日をもって平成の時代が幕を閉じた。そして翌日、憲政史上初となる生前での代替わりが行われ、新元号となった『令和元年』が始まった。

平成から令和へのカウントダウンも、懸念をよそに静穏に明けた。正月や成人式とは異なり、日本独自である〝元号〟に対して、敬意敬愛を感じたのかも知れない。

私は、昭和・平成・令和と3つの時代を歩もうと思う。昭和と平成ではどっちの時代が良かったのかな?と。当然私にとっては平成が一番長いのだけど、少ない記憶の昭和が印象に残っている。

父の事故死に、母の癌手術等良い記憶ではないのだけど、両親が揃っていた時代が私にとっては良くも悪くも印象深くある。

父は酒乱の上働かないという、典型的なダメ親父(男)で母と私はその度暴力を受けていた。今で言う所のDVも含まれていた様にも思う。おかげで父の優しい記憶は無く、小学5～6年生まで、父親とは暴力を振るうものであり、同級生達も我慢しているとずっと思っていた。

そんな父も、私が8歳の時目の前で不慮の事故で他界した。当時はこれで父からの暴力から解放される、と喜んだものだったが、最近ではその考えが少しずつ変化している。

その後母子家庭となり、暴力のない生活になったけれど、亡き父の負遺産である借金に苦しめられる事となった。家に電話は無いし、風呂もない。ライフラインである電気・ガス・水道は定期的に止められた。然し、母の妙なテンションの明るさに救われていた。「無料（タダ）でキャンプしてると思えば楽しいでしょ！」とロウソクに火を点けていた母。（んな訳ねぇーだろ！）と心の中で突っ込みながら「そうだね」と合わせていた。でも冬は笑えませんでした・・・。

子供の適応力と言うか、順応力と言うか我ながら、文句を言いつつ楽しんでいたのだろうと、今は思える。然しその反面、貧乏というのはイジメを誘発させる必然の要因だった。TVはあってもビデオは無く、ラジオがあってもラジカセは無い。当時の小中学生は、テレビっ子で今より俄然視聴率が高く、学校での話題は前日のTVの内容から始まっていた。

当然電気が止められれば見れないし、稀に外食ともなれば、録画が出来ずにTVが見れずに次の日が億劫であった。となると、当然会話も出来ず、嘘を付いても見ていないのだから当然齟齬が生じ、友人からは訝るような目で見られる日が多くなり、遂にその日はやって来ることとなった。

とは言っても私は、ただやられるだけではなく、やり返していたので最近のイジメ等とは多少違ったのかも知れない。更に言うとやり返さなければならない実情があったからだ。給食費が無くなったと、私に冤罪をきせる事もあったが、知らぬものは知らぬと言えたが、靴やカバンを隠されたり、盗られたりする方が困るので、それはもう死にもの狂いで抵抗した。何故なら、母にバレるという事ではなく、又買わせるという金銭面での負担をかけたくなかったからだ。窮鼠猫を噛むである。

父が亡くなっても保険等に入っておらず、保障がある訳もなく、ただ々借金が増えただけだった。父が48歳、母が36歳の当時にしては遅い子供だったので、父が他界後は、母の仕事も夜の仕事しかなく、(当然昼もパートをしていた)日々の生活で大変だったからだ。勿論母に心配をかけたくない思いも強かったけど、当時の私には、母にお金を使わせてはいけない、という事が第一だったからだ。癌の手術の後も、喉の手術や、突然鼻血が洗面器を使わないといけない程出たりと、躰が弱かったのでいざという時の病院代が必要だったからだ。満身創痍のくせに弱音を吐かぬ母だから。

そんな理由で必死に抵抗したおかげ、かどうかは分からないけど、私に対するイジメは長く続く事はなかった。ただ、この抵抗がきっかけで所謂不良と呼ばれる同級生と仲良くなった。当然母の前では良い子の顔をしていたが、後年母に「アンタも一時グレてたもんね」と言われ、何だかんだいっても、ちゃんと見ててくれたんだなぁと思った。やっぱ親ってスゴイもんだなぁと、今でもしみじみ思う時がある。

私の小学生から高校生迄の間、転校をしなかった時はなく、小学校で3回、中学で1回、高校で2回転校している。小学生の頃は夜逃げ同様の引っ越しも経験した。正直、今でこそ笑い話だが、当時は本当に生きるのに必死だった。生きる為に商店のパンを盗んで食べたり（俗に言う朝パンドロボーの事）もした。時代はバブルが終わった後だったけど、うち程貧乏な同級生はいなかった。

正直、友人達が羨ましいと何度思ったことか。その度母に酷い言葉を浴びせたこともあった。でも母は決まって「人は人、羨むならどうやったら自分がそうなれるか考えな」と言われた。そして次の言葉で話を締めるのだ。「いつまでも、あると思うな親と金。あっでもお金はずっと無いけどね」と笑うのだ。母は強し。

私は今、父の写真が一枚も無い。形見として呼べる物も無い。墓参りも2回程行っただけだ。頑張って小さい頃を思い出そうとしても、父の顔が出て来る事はない。出て来るのは電車の中に灰皿があって、普通に電車の中で煙草を吸いまくる人達。冷凍みかんのネットをリンゴの形にしてるおばあちゃん。プラスチックの臭いが強い駅弁のお茶。ドリフのギャグをしつこく真似して、母に私が怒られ泣いている後で笑う父の声。父を思い出そうとすると、これしか出て来ないのだ。一度だけ、母と歩いている時に、「あの人お父さんに似てるね」と言うと「アンタ本当に覚えてないんだね。全然似てないよ」と言われ、ショックを受けたのを覚えている。それ以来私が父の話をしたことはない。覚えてる記憶に父は出ないし・・・。

小学校時代は、近所の大人達に悪さをして怒られた記憶があるが、平成になると、たまたまかも知れないが、怒られる事が激減した気がする。カミナリ親父等見なくなったからだ。そしていつの間にか、引っ越しても隣近所に挨拶をする事も稀な事になっている昨今。

最近では、プライバシーを守る事が優先となって、隣の住人の顔さえ知らぬのが当たり前になってきている。カミナリ親父の変わりに所かしこに防犯カメラが設置されている。凄惨な事件が多発している事を考えれば、当然なのかも知れないけど、私的には、町内近所の大人達皆で子供を育てる、所謂下町人情物語が本当の意味で良い環境だと思っている。

私は父親像というものに、良いイメージがないのは前述した理由からだけど、イジメや虐待等の問題は、町内や地域ぐるみで対応すれば良いのにと思うので、こういう部分を考え、照らし合わせると平成より昭和の方が、厳しくも大人の温もりが感じられたからだ。実際本当に私もよく怒鳴られたもんで、その家の前を通る時は、体が勝手に忍び足になったもので、悪い事の限度を学んだものです。

私は本当に父が嫌いだった。けれども最近は妙に「一緒に酒が飲めたらなぁ」と思う事があり、驚いている自分がいます。理由は子供が出来て、それなりの時間が経過したからだと思うのですが、こんな感情に自分がなるとは信じられないからです。本当に不思議です。

暴力でやりたいようにやり、病弱といえる母に働かせていたのに、そんな父と飲みたいと、よりによって酒乱の父と酒を・・・なんて。でも、事実なんです。悔しいけど父の好きなキリンラガービールとあんパンを肴にして、母の分まで文句を言ってやりたいのです。

受刑生活も折り返しになり、自分の年齢と残りの人生を考えた時、絶対に許せないモノが、ゲシュタルト崩壊のように突如瓦解したのです。これ以上の理由としては、母が何でこんなろくでなしと結婚したのか？とずっと疑問に思っていたけど、答えを知る事は叶いませんでした。でも、あの母が一緒になったのだから、きっと良い所もあったのだろう。というより、父を認めないと私の存在、要は母を否定する事になるのでは？と思ったからです。いくら嫌いでも、きっと容姿は似ているだろうし・・・と。でも両親がいての私だから。

令和と共に両親を想い、父への気持ちが変化した平成の終わり。数年後の出所に向かい、自己の気持ちを整理し、二度と獄に戻らない生活をすると誓い歩いて行きたい。解釈的には刑期が終われば犯した罪は無い事となる。然し実際は終わらずに、犯罪歴として一生ついてくる。ただ生きるだけで弊害が起こるけど、しっかり受け止めなければ更生はない。

父と飲みたくなったのも、大きな変化で良く言えば成長なのかも知れない。令和と共に新たな気持ちで、出所後両親の墓参りに行き叱って

もらおう。父が昭和に逝って母が平成に逝った。私は反省と共に令和を歩き続ける。両親への唯一の親孝行は、逮捕された姿を見せなかった事だろう。新時代に両親を想った。

佳作

君たちはどう生きるかを読んで

山形刑務所　米氏愚

「君たちはどう生きるか」、著者は吉野源三郎、ポプラ社より出版された小学校高学年向けの文庫本です。数年前に大ヒットしましたが、原作原文は一九三七年七月に出版され、八十年以上も前、戦前の作品です。何度も改訂されているため、話は大変判りやすく、三百ページ程と量的にも手軽なこともあり、まだ読んだことのない方にも是非お勧めしたく、今回の作文の題材に選びました。

簡単なあらすじですが、主人公のコペル君（あだ名、本名は本田純一。中学一年生）の学生生活の出来事、友人関係等における悩みを通し、コペル君が人間的に成長してゆく過程が描かれています。特にコペル君とその伯父さんとの手紙でのやりとりや、二人の会話が大切な焦点になっています。

この本を読み最初に思ったことは、うらやましいという一言に尽きます。人生を導いてくれる伯父さんという存在、とても心温かい友人が何人もいること、主人公自身も優れており、恵まれていて正しくあろうと努力をする。物語そのものが美しいとさえ感じます。自分には手に入れられなかったものが全てあるような、そんな気持ちで読んでゆきました。

どう生きるかという言葉は、受刑者である私にとって何よりも重たい言葉です。受刑生活や出所後の社会生活を真剣に考えるとき、「どう生きるか」という言葉こそが、更生の本質的な問いであると感じるからです。私はどのように生きてゆくべきか考えたとき、大変な問題にぶつかりました。私は受刑者であり、未来においても、過去の罪が消えることはないという事実です。私は多くの本に書いてあるように、生きるとは幸せを目指す活動であると考えています。ところが、幸せになりたい心、罪を悔いる気持ち、被害者に対する謝罪の想い、将来への不安などが複雑にからまり、自分を苦しめています。幸せになりたい、人を幸せにしたい、正しくありたいという気持ちさえ、その資格があるかという内なる声によって苦しみに落ちていってしまいます。この悩み、迷いは、私の罪が決して消えないのと同様に一生消えないかもしれません。もしかしたら、そのために一生幸せになることは出来ない、そう考えてしまうのです。

私の悩みはこれからの人生をかけて考えてゆかなければならない問題ですが、本書にはどのように大きな困難に立ち向かってゆけば良いか、まるで直接に、私に対して書いてくれたのではないかと思う程、感銘を受けた一節があります。コペル君のとある過ちに対して伯父さんが送った手紙の一節です。

『（中略～）苦しみの中でも、いちばん深くぼくたちの心につけ入り、ぼくたちの目からいちばんつらい涙をしぼり出すものは、自分がとりかえしのつかないあやまちを犯してしまったという意識だ。（省略～）自分自身そう認めることはほんとうにつらい。だから、たいていの人はなんとかいいわけを考えて自分でそう認めまいとする。しかしコペル君、自分があやまっていたばあいに、それを男らしく認め、そのために苦しむということは、それこそ、天地の間で、ただ人間だけができることなんだよ』

初めてこの一節を読んだとき、心につき刺さり、ハッとしました。もし誰かからこのように言葉をかけてもらったら・・・、きっと滝のような涙が流れるでしょう。本書に心を打たれた後でも、どう生きるかを考えたときいろいろな不安や言い訳が溢れてきます。情けない限りですが、それが今の自分自身なのです。

私は本書を読んで、うらやましいという一言が最初に浮かんだと書きました。コペル君の過ちと私の過ちでは、問題のレベルが違うと思いますが、他人の苦しみを自分の価値観で、自分の苦しみと比較なんてしてはいけないと、この作文を書いていく中で思い直しました。その他人がたとえ物語の中の人物であってもです。伯父さんがコペル君へ宛てた手紙に書いてあったように、「自分の」過ちを認め、そのために苦しむこと、そのことをこれからきちんと考え、更生につなげてゆこう、それが今の私が出した、「どう生きるか」という問いに対する答えです。

以上

佳作

誓い

福島刑務所　W・G

私達受刑者は刑期が有期刑であれば必ず刑期の終了する日があり、その翌日には釈放されますが、帰る場所のある人も、そうでない人も、所持金を持っている人も、そうでない人も、釈放されたその日から、住む場所と食事を自分で確保していかなければならない状況になります。

刑務所にいれば皆が皆差別なく、雨風を凌げる部屋の中で同じ服を着て、同じ食事ができ、どれだけ養護されてきたのか・・・と考えた時に、真剣に出所後の生活について考え、今後の人生で再び刑務所に来ないようにするために、今からでも釈放後の生活のことを考えてみようかなと思います。

釈放後の生活を考える上で大切なことは、社会の中での自分の「居場所」と、自分が社会の中で「活躍できる場所」があるかどうか、また、社会生活の中で悩みや障害がある時に「相談できる人物」がいるかどうかになると思うのです。

刑務所から釈放された出所者の多くは帰る場所がなく、頼れる相談相手もいなく、住む場所がない人が半数以上で、所持金が無くなり生活ができなくなって、一年未満で再び犯罪に及ぶ人が多いと聞きます。

そんな私も今回の刑期を終え釈放された後の帰る場所も住む場所も定まっておらず、所持金も余裕があるわけではないので、せめて刑務所にいる内に出所後に雨風を凌げる居場所を確保できればと思い、知人だったり更生保護施設を帰住先として申請をしています。

何もせずに諦めてしまえばそれで終わり。

何の解決にもならず不安は積もるばかり。

釈放後の生活で困るのは自分自身なので、自分で行動することが第一歩に繋がると信じて、現在十三回目の申請をし、調整をしています。

どんなに帰住不可になったとしても私は諦めずに申請し続けるつもりです。

親族ではなく知人を引受人に申請するためには、その相手などから手紙などで承諾を得る必要がありますが、更生保護施設は全国各地にあるので、何度も諦めないで今できることを続けていきます。

刑務所に再入所する人の内、再犯時に無職だった人は全体の約七割で、無職だった人の再犯率は有職者の約三倍であることが統計上で判明しているらしいです。

「働く」ことの意味を調べてみると、職業や業務として特定の仕事をすること、そのものとしての力が生かされること、役に立つことなどとされています。

社会で生活をしていくためには金銭が必要不可欠です。

私は釈放後に地元に戻ればすぐにでも働くことができるのですが、私は釈放後すぐの仕事よりも、数か月後に社会の流れも分かり、気持ち的にも余裕ができた時に少しでも犯罪にかかわらない生活をするためにはどうすることが大切なのだろうか・・・と考えた時に、地元に戻れば昔の悪友が再び声をかけてきて、自分の周りには毎回犯罪の誘惑が付いて回ると思い、私は自分の生活の基盤ができるまでは今まで生活したことのない土地で生活をし、今後の人生で本当に刑務所に戻ってこない・・・と誓いたいと思っています。

人によっては「何も地元を離れなくても誘いがあっても断ればいいじゃないか」「仕事があるんだからまずは働くことが大切なことだろう」と思う人もいると思います。

確かに人が見た時に働いているということが「真面目」「更生」と思う人もいるかもしれませんが、私は働くことよりも大切なことは犯罪から離れた生活をして、それから自立をするために仕事をしなくては今までと何も変わらないと思ったのです。

私は誘いを受けた時に初めは断ることができても、何度も誘われている内に同じ過ちを犯してしまうと分かっています。

何故ならば私はその快楽を知ってしまっているからです。

私の今後の目標は今までの経験を生かして自分で会社を経営することです。

幸いにも今までの現場では真面目に仕事に打ち込んでいたので、様々な会社の人と知り合い、協力をしてくれるという人にも出会いました。

釈放後には何もないところから始めていかないといけないのでその大変さは想像できない部分もありますし、大丈夫だろうか・・・と心配にもな

ります。
でも私は私の目標に向かって自分に負けないという気持ちで目標を達成したいと思います。
そのために今の私が取り組んでいることは、刑務所での作業に対して常に真剣に取り組み全力を尽くすことです。
私達受刑者が行っている刑務作業のほとんどは社会で仕事をしている人から見れば鼻で笑われてしまうような作業なのかもしれません。
それでも、今与えられている刑務作業を自分の仕事として考えていますし、刑務作業を通じて必ず何かを得られるはずです。
そしてどんな作業であっても真剣に取り組んでいれば、誰も笑う人なんかいないはずです。
そう・・・今、私達受刑者が刑務所であっても、社会生活であっても大切なことは、人に笑われない生活をしていくことなのです。
それが更生への道となり、人との信用・信頼と繋がり、人生の宝物となるはずだと思っています。
最後に自分の力を生かして役に立てることって何だろう・・・って考えた時に、今の自分は生きているのではなく周りに生かされているのだと思う時があり、これからの人生の内少しでも多くの時間（命）を人の為に利用できないだろうかと思い始めたのです。自分が時間をかけて人の役に立てる生活・行動をすることで生きがいだったりやりがいだったりを実感し、生活への活力になるのだと思います。
また「人は一人では生きてはいけない」という言葉があるように、人は人と関わることによって様々な大切なものを得られるのだと思います。
生きることの意味・・・そのことを考えて二度と刑務所に戻ってこない人生を歩んでいきます。

【選評】―作文―

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問
原田勇男

応募作品は十三篇。金賞は鳴寂さんの「ゴルフから学ぶ人生」。この筆者は四十七歳でゴルフを始めたが、事件を起こして刑務所入り。ある時ゴルフ雑誌で「塀の中の懲りないゴルファー」という物語を読んで感動した。

物語の主役は、米コネチカット州の法律事務所に勤めるC・ブラームス。彼は銃撃事件を起こして収監された州刑務所の中で、ゴルフの本を読み特別に差し入れを許可されたアイアンでスイングを繰り返した。五年後に仮釈放された彼は、全米アマ選手権予選に出場するほどの見事なプレーヤーに成長した。しかし、交通事故のため不慮の死を遂げた。

彼は日記の中で「私は人生で取返しのつかないミスをした。元に戻すことは絶対にできないけれど、それでも一生かけてリカバリーしようと思う」と書いた。この筆者も人生を再生するために前を向いている。

銀賞はY・Tさんの「風の少年」。岩手県大槌町に無回線で設置された「風の電話」を舞台に、出所後被災地を回る男と津波で母を失った少年との心の交流を描いている。男は長い間母に会わなかったが、少年と話しているうちに、母に会う決意を固めた。

銅賞は九州男さんの「願いの歌」。街の片隅で黒いギターを掻き鳴らしながら歌う若い男。この夜は家庭のことで悩んでいた少年、妻子ある男性との愛に苦しんだ女性が、彼の歌を聴いて元気を取り戻した。彼は歌う。心に闇を抱えて夜を迷う人々のために。

《詩　苑》

金賞

桜の花

山形刑務所　龍齋（K・T）

桜の季節はやってくる
うす紅いろの花びらが
早く開くときもあれば
遅いときもあるけれど
春が来れば桜の花が咲く
夏には太陽の光をたくさんあびて
秋には実って種をつくり
冬の寒さをじっとこらえて次の春を待つ

今はまだ冬のさなか
雪まじりの風に耐え
そのときが来るのを待っている
ようやく芽吹いた蕾に力を蓄え
花を咲かせようと待っている
芽が出たからといって
花が咲くとは限らない
そのまま開かず終わってしまう蕾もある

溜めておくべき力が足りなかったのか
咲けるはずなのに咲かないのか

誰かを笑顔にすれば花が咲く
誰かを喜ばせれば花が咲く
誰かの役に立てれば花が咲く
誰かを助けてあげられれば花が咲く
この限られたときの中で自分の存在する意味を表すことができたなら
きっときれいな花を咲かせたといえるのだろう
そして自分が死んだとき泣いてくれる人がいるなら
その人の心にも花を咲かせられたのだろう
生を全うした花びらが散るとき
人々の心に感動を与えるように
これからの自分もそうでありたい

今はまだ冬のさなか
力を蓄えるとき
桜の季節はやってくる

銀賞

道

福島刑務支所　O・C

いつも居場所を求めてる
心の置き場を探してる
孤独　不安　満たされぬ感情
虚勢　プライド　わきおこる希望
様々な言葉に置きかえられた心模様や
脳裏に住みついている記憶の数々の
ひとつひとつを数えあげ
一切合さい　閉じこめて
落ち着く場所にたどりつこうと
求めて
探して
いつの日か
満たされることを願ってた
今までも今も
これからも

銅賞

生きろ

山形刑務所　九州男

辛くて、辛くて、辛くて、辛くて。
苦しくて、悲しくて、寂しくて。
きつくて、空しくて、光も見えなくて。
生きてる事を恨んだ事もあるだろう。
産んでくれた母を、育ててくれた父を、
恨み、憎んだ事もあるだろう。
自らの命を、自らの手で閉じようと、
バカな事をした事もあるだろう。
辛くて、辛くて、辛くて、辛くて。
それでも、我武者らに生きる事。
生きて、生きて、生きて、生き抜いて、
その内いつか、笑えるだろう。
小さな光も差すだろう。
産んでくれた母に、育ててくれた父に、
「ありがとう」と言える日が来るだろう。
そう思える日が、必ず来るから、
だからその日まで、
生きろ。

佳作

ルネッサンス

宮城刑務所　N・S

いったいいくつのカギが必要なんだろう
この足枷を取り払うには
いったいどれくらい走り続けるのだろう
自由の国から自由になる為には
今日は誰かが血を流し
今日は誰かが涙を流し
そんな光景をいくつ目にすれば
僕らはもっと利口になれるだろう
逃れられぬ世界の果てで
希望の扉を抉じ開けろ
見果てぬ地平が輝き続ける限り
この夜を越えて行こう

実際何を話したとゆうのだろう
二度と逢えない君なのに
実際後何度サヨナラを繰り返せば
この悲しみから逃れられるだろう
たとえば誰かを殺して
たとえば誰かを傷付けて
成立してしまう幸せなら
そんな不幸からまず自由でありたい
逃れられぬ世界の果てで
絶望の淵から見つけ出せ
憎しみじゃなく悲しみじゃなく
この夜を越えて行こう
心を無くした日々を重ねて
心の通じ合わぬ時間をきざんで
言葉無くして立ち尽くす
この広野に響け
逃れられぬ世界の果てで
未来の扉を抉じ開けろ
見果てぬ地平が輝き続ける限り
この夜を越えて行こう
この夜を越えて行こう
この夜を越えて行こう

佳作

理想を語って何が悪い

山形刑務所　激情公

水の沸点は百度
それが常識だと思っていた
だけど知った
水の沸点が九十度
そんな場所もあるんだと
気圧が変われば沸点も変わるんだと
だけどそれを知る前の私は
「水の沸点が九十度」だと言われても
そう言った人を笑っただろう
私達はよく「普通」という言葉を使うけど
それって世代や性別や生まれ育った環境
そういった事で違ってくるものだから
「普通」ってきっと「価値観」の事だろう
「常識」はその「価値観」で信じている知識
誰もが皆自分の「価値観」を信じていて
それが正しいと思いがちだから
自分とは異なる「価値観」に出会った時
その人の真価が問われる事になる
相手の「価値観」は無視か否定で
自分の「価値観」が絶対的に正しいと
思い込み相手にまで押し付けてしまうと
関係は悪化してしまうだろう
「価値観」が対立していたとしても
人まで対立する必要なんてないのに
一方だけが正しいとは限らないんだから
両方間違っている事だってありえるんだし
両方正しい事だってありえるんだから
望みを叶えて欲しいという期待が過ぎて
押し付けという強要になるのだろう
だけどそこから抜け出して
お互いの「価値観」を認め合って
お互いに歩み寄る事ができたなら
きっと良好な関係を築く事ができる
この世界にいる全ての人と人が
この世界にある全ての国と地域が
そうする事ができたなら
この世界から心が原因の争いはなくなる
私はそんな未来を心の底から望んでいる

佳作

輪廻の先で、また会おう。

福島刑務支所　H・H

ぼくは、自分の奥深い部分(ところ)に、鍵をかけた。
感情、出来事、とにかく色々閉じ込めた。
生きる術を見付けたので、忘れたかった。
あの日、どしゃぶりの雨の夜、幻想にまみれた自由を求めて、大空へとダイブした。
気が付けば、ヒトリぼっち。
自分だけが違う世界の真ん中にいた。
何事も無い様に流れる時間は、何も無い。
まるで、自分の存在など無かったかの様。
頑張るとか、生きるって、何だっけ。
消えて無くなりたかった。
存在が続くかぎり、仕方が無い。
ぼくは、ぼくになった。
眠れない夜をいくつもかぞえて、おもった。
自分は、何処に向かっているのだろう。
何になりたいんだろう。

当たり前にやってくる朝がこわかった。
晴れた青空でさえ、何かが違って見えた。
生きている意味・理由などが、わからない。
自分の存在、何もかもに耐えられない。
そして、自分の中に、自分が増えていく。
ある日、キミと出会った。
どんな自分もあなただから、と、ほほえむ。
大切にされ、愛される事が、こんなにもあたたかく包み込んでくれるなんて、知らなかった。
ぼくは、変わりたかった。
キミと一緒にいられるだけで、よかった。
それだけで、じゅうぶん生きる理由になる。
だから、頑張りたかった。
バラバラになった自分のカケラを拾い集め、部品を付け加え、新しい自分を組み立てる。
ぼくは、ぼくにかえる。
この声は、ちゃんと聴こえていますか。
自分は、確かにココにいる。
強くなりたい。
キミがぼくにしてくれた様に、ぼくも誰かや何かにとって、そうでありたいから。

【選評】―詩―

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問　原田　勇男

応募作品は十三篇。金賞は龍齋（K・T）さんの「桜の花」。春夏秋冬について言葉を紡ぎながら、厳しい冬に耐えて春を待つ自然の情景を抒情的に描く。ここまでは文字通り自然のサイクルだが、後半で誰かを笑顔にし、喜ばせ、誰かの役に立ち、助けてあげられれば花が咲くと、視線は人の内面に移る。「この限られたときの中で自分の存在する意味を表すことができたなら」と自問する。今は冬の時、力を蓄えて春の季節を待つと結ぶ。

銀賞はO・Cさんの「道」。長い作品が多い中で、自らの居場所を探して生きる姿勢を十五行の詩句で簡潔に表現している。孤独や不安、虚勢など、さまざまな心模様と忘れられない記憶の数々をひとつひとつ検証し、一切を閉じ込めて、落ち着く場所にたどりつこうと求めてきたが、いつか満たされることを願う気持ちが伝わってくる。何が起きるかわからない時代に居場所を見つけるのは難しいが、生きている限り挑戦は続く。

銅賞は九州男さんの「生きろ」を選んだ。現実は思い通りにはいかない。辛くて、苦しくて、悲しくて、寂しくて、生きていることを怨んだことや自らの命を自らの手で閉じようとしたことがあっても、生き抜いていれば「そのうちいつか、笑えるだろう。／小さな光も差すだろう」と鼓舞する。産んでくれた母と育ててくれた父に感謝する日がきっとくる。だからとにかくひたむきに生きろと人生の応援歌を響かせている。

《歌　壇》

金賞

ふき土筆たんぽぽ四ッ葉ねこじゃらし笹枯ススキ子供七草

山形刑務所　米氏愚

銀賞

天井の電灯の笠に蛾の死骸五匹の写り毎夜眺むる

宮城刑務所　T・S

血が騒ぐ夏が大好き祭馬鹿津軽に響くねぷたばやしが

青森刑務所　K・S

ただいまとおかえりの声響く家幸せ気付かず我が罪重く

福島刑務支所　F・K

銅賞

ラグビーのルールも知らず沸く日本我いる獄は変わらず静か　宮城刑務所　力風

青空に桜の花びら舞いあがる今日が昔となりたる日にも　宮城刑務所　須磨の雅正

父祖の地を守っていくと老農は団地の囲む一枚田刈る　秋田刑務所　K・K

その自国第一主義が呼び寄せた世界大戦繰り返すのか　山形刑務所　激情公

母からの差入されたくつ下の毛玉ひとつも捨てられぬなり　福島刑務支所　I・S

甚平に袖を通せる幼子の笑顔思いて今日もミシン踏む　福島刑務支所　K・M

佳作

君のこと思い浮かべぬ西日本豪雨から早一年過ぎて

青森刑務所　鳴寂

足音をさせぬ看守の気遣いに我は甘えて深く眠りぬ

青森刑務所　O・J

降り止まぬ道の窪みに小さき鳩雨水飲みては空見上げおり

宮城刑務所　浄命

うなだるる母の背中をすべもなく夢路の吾はぢっと見てをり

山形刑務所　弘雀

雪のようふわふわとした綿菓子をほおばる君の顔はかくれぬ

山形刑務所　雨音

臥す父へ人屋のわれに術のなく今宵もひとり低く経読む

山形刑務所　川頁

冬晴れの午後のしじまを打ちやぶる屋根からおちた大きなつららら

山形刑務所　玉兎

母からの慣れぬ手紙の暖かさ世間はメールの時代なりても

山形刑務所　無縁仏

百日紅暑さにめげず咲きつぐに癌病む友の知らせが届く

福島刑務所　T・M

麦飯に梅ぼしまぜて赤飯とす孫の誕生日祝うこの朝

福島刑務支所　E・K

【選評】―短歌―

短歌結社「橄欖」運営委員
宮城県歌人協会「橄欖」宮城支部代表
宮城県芸術協会選考委員兼編集委員
日本歌人クラブ会員
伊藤　久子

【金】ふき土筆たんぽぽ四ッ葉ね
こじゃらし笹枯れススキ子
供七草　　米氏愚

「評」春の七草、秋の七草は昔から一般に知られていますが、ここでの「子供七草」は、独創性がありとても愉しい歌になりました。子供の頃無邪気に遊んだ野原のそれぞれの植物を思い起こさせてくれて、良くぞ三十一音に仕上げたと感心しました。

【銀】天井の電灯の笠に蛾の死骸
五匹の写り毎夜眺むる
T・S

「評」いつも寝るときに見ている笠の中の蛾、きっと気になっているのでしょう。ちょっと不気味ではありますが、「毎夜眺むる」に、現実から逃れられない鬱屈した感情がかいま見えてきて厳しさが伝わって来ます。

【銀】血が騒ぐ夏が大好き祭馬鹿
津軽に響くねぷたばやしが
K・S

「評」青森県の西部地方「ねぷた祭り」の躍動感が伝わってきます。「大好き」と素直に述べて成功しています。感情に暗さが無く、読者を賑わいの世界に誘(いざな)ってくれました。

【銀】ただいまとおかえりの声響
く家幸せ気付かず我が罪重
く　　F・K

「評」何でもないような日常に本当の幸せがあったと今気が付いた。「我が罪重く」の結句の展開が、現実に戻された感じをとても上手く表現されて気持の通った歌になりました。

【銅】〈I・S〉さん、「毛玉ひとつも捨てられぬ」が、佳い。〈激情公〉さん、唯一首だけの時事詠であり、他の佳作も僅差でした。

《俳　壇》

金賞

シュプールやシュプールにより消されゆく

山形刑務所　米氏愚

銀賞

塀越しの近くて遠き花明り

宮城刑務所　伏龍

風花やひとつひとつの光かな

山形刑務所　和希清明

思い出をめくりたがるや秋の風

福島刑務所　H・H

銅賞

しみじみと悔いや綿雪降りつもり

秋田刑務所　O・D

獄塀の真黒き染みや初景色

山形刑務所　弘雀

彼おもい更生誓う盂蘭盆会

山形刑務所　曼珠沙華

雪降ればひとり語りの茶碗酒

山形刑務所　冬竹

我が髪に白き一本秋の風

山形刑務所　無縁仏

佳作

炎ゆる日に挑むが如しキミ走る

青森刑務所　鳴寂

秋雨に濡れる鳥が室内（へや）覗く

宮城刑務所　力風

想い出とともに色褪せ夏帽子

宮城刑務所　O・M

待つ人のおらぬ家路や秋の暮れ

宮城刑務所　美重

病みし眼に静かな冬の陽射しかな

宮城刑務所　シオン

故郷を想う野焼きの香りかな

山形刑務所　不二天風

落としてはとしっかり孫抱く老いの冬

山形刑務所　仁和

新幹線の窓から桜のエール

山形刑務所　龍齋

あめゆとてちてけんじゃ庭石の雪

山形刑務所　W・R

縁側で神輿見守るかやりぶた

福島刑務支所　K・N

母想い見上げた空に雲雀鳴く

福島刑務支所　M・M

【選評】―俳句―

現代俳句協会宮城県支部幹事
宮城県俳句協会常任幹事
宮城県芸術協会委員
鈴木　三山

俳句の源流は近世に発展した俳諧連歌であると言われています。さらに連歌の歴史をたどると和歌に行きつくことはご存知だろうと思います。因みに新元号が万葉集の序文から引用されたように、日本語の韻律である七五調や七七調などは日本人に固有のリズムとして育まれてきたものです。

俳句は世界最短詩と言われるように五七五の十七文字で表現しなければならないために季語や切字を使うこととか、定型を守ることなどの制約があるが、制約に捉われない試みもなされてきています。肝心なのは自分を含む自然の在り様を如何に芸術作品として表現できるかによるのであり、技術的な表現方法にはあまり拘泥しない方がいいのかも知れません。

それでは入選句の選評に移りましょう。

シュプールやシュプールにより
消されゆく
山形刑務所　米氏愚

シュプールとはスキーで雪上に残る滑った跡のことを言うのですが、その跡が新たなシュプールにより次々と消されてゆく情景に自分の辿ってきた人生を重ね合わせたのではないでしょうか。如何に見事なシュプールを描いても新たなものが塗り替えてゆくのが人生です。即ち人生とは前進あるのみなので、後を振り返らないことが肝心のようです。

塀越しの近くて遠き花明り
宮城刑務所　伏龍

今年も桜の季節がやって来た。麗らかな陽気のもとで花見をした思い出が蘇る。折しも塀越しに空いっぱいに咲く桜花のあかりが見られた。塀の外は近いようでありながら自分には遠い世界に感じられたことでしょう。

風花やひとつひとつの光かな
山形刑務所　和希清明

風花とは晴れた日に雪が風に舞うようにちらちらと降ることを言います。特に山深いところでの風花の舞う風景は実に美しい。作者

は雪のひとつひとつに日が当たって光り輝いている様を捉えていて素晴らしいです。

思い出をめくりたがるや秋の風

福島刑務所　H・H

秋風の吹く頃になるといろいろと物思いに耽ることが多くなるものです。作者は一人で読書やアルバム整理でもしていたのでしょうか。懐かしい思い出が次々と浮かんで来るのは秋風のせいだとして「めくりたがる」の表現が上手いですね。

《柳　壇》

金賞

不器用な兄の手紙に父重ね

山形刑務所　九州男

銀賞

聞こえるよ吾子とママとのあのねのね

山形刑務所　W・R

いつも見る手が躍ってる握り飯

福島刑務所　A・S

母からの日記が届く月初め

福島刑務支所　S・S

また来るねふりむく姿大人びる

福島刑務支所　M・M

銅賞

年ごとに親の言葉が重くなる

宮城刑務所　浄命

木漏れ日に友の幻「遊ぼうぜ」

山形刑務所　激情公

待ちわびて毎日覗くポストかな

山形刑務所　鴉林檎

マイナスに数えて祝う誕生日

福島刑務支所　O・C

佳作

とりあえず筆で令和と書いてみる
宮城刑務所　力風

悲しみの瘡蓋うずく獄の暮
宮城刑務所　伏龍

さりげなく心の兄は助け船
秋田刑務所　K・M

今日ひと日明日もひと日と気合入れ
山形刑務所　曼珠沙華

漆黒の無心を映す墨を擦る
山形刑務所　天聖

不仲から踏み出すことは許すこと
山形刑務所　無縁仏

草餅に看守の話もうわの空
福島刑務所　I・K

もう一度自分を信じて生き直す
福島刑務支所　I・S

悔しくてながした涙忘れない
福島刑務支所　H・H

あなたとの距離を邪魔するアクリル板
福島刑務支所　K・M

まってるよあなたの言葉お守りに
福島刑務支所　I・M

【選評】―川柳―

川柳宮城野社同人
宮城県芸術協会会員
佐藤岩男

四十二名の方々からの百十六句の川柳をいただきました。今年も心打たれる句が多く、金賞一句・銀賞四句・銅賞四句そして佳作十余句を選ぶのに苦労しました。

特に目立ったのは、手紙や日記であるいは夢や実際の会話を通して、親子兄弟孫などの肉親との強い絆が感じられる句が多かったですし、過ぎ去った日々のあれこれやこれからの生き方などをじっくり考えた句も多かった中で、現在の社会の姿に目を向け自分の考えをきちんと掴まえている句が目につきました。

五音・七音・五音の限られた十七音だけで自分が見たり聞いたり感じたりしたことを表現するのですから、言葉の無駄はできません。と言っても、事実の報告や解説だけでなく、自分の心の動きをどう伝えるかが重要になるようです。

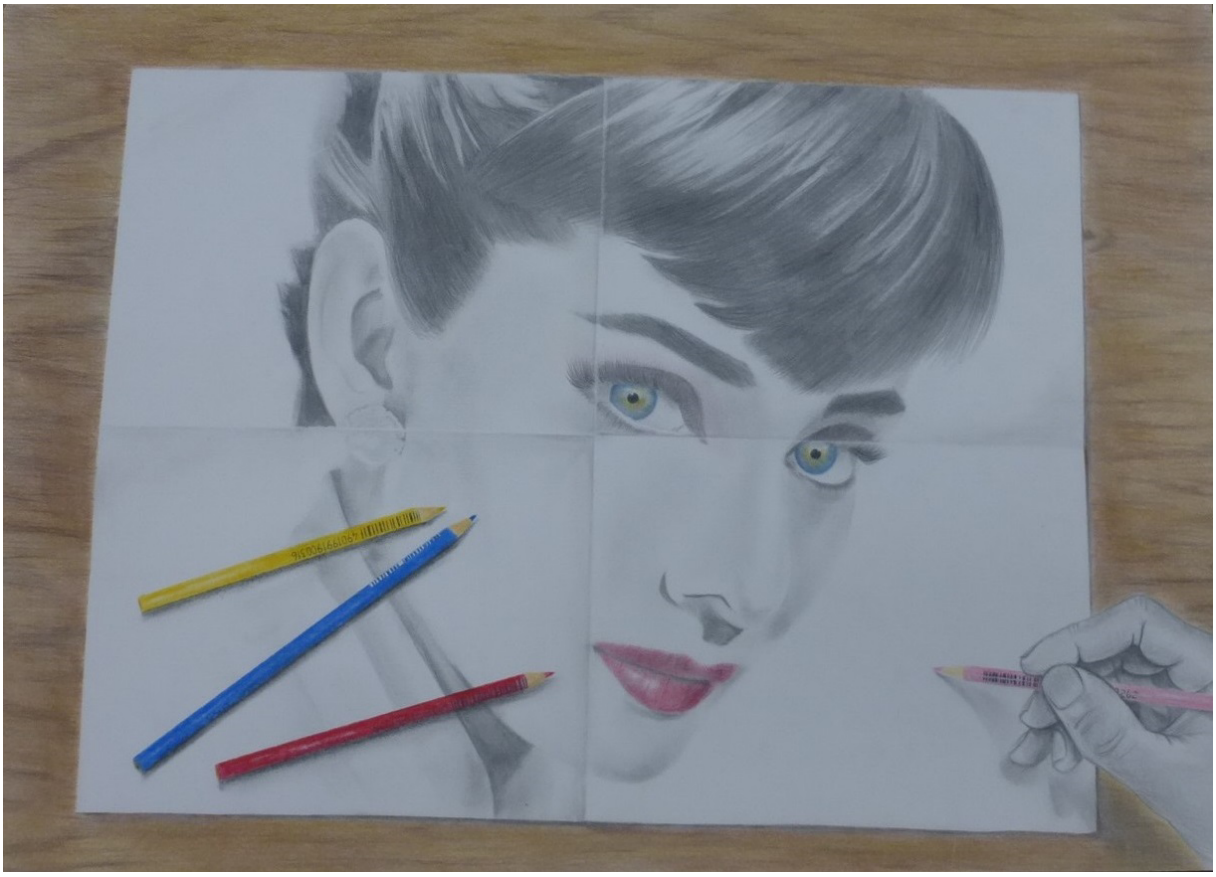
人生には、嬉しいことや楽しいことよりも苦しいことや悲しいことの方が多いような気がします。しかし、川柳にはこのような辛さをはねのける力が秘められているようです。

難しい言葉を使う必要はありません。とりたてて飾り立てる必要もありません。素直にいつも使っている言葉で、自分の思いを十七音で表現してみましょう。

なお、十七音を五・七・五に区切る必要はありません。続けて一行で書いてください。

《 絵　画 》

金　賞



『トロンプルイユ』
山形刑務所　M・N

【選評】　だまし絵的手法の絵でシュールな感覚を出しています。おもしろいです。

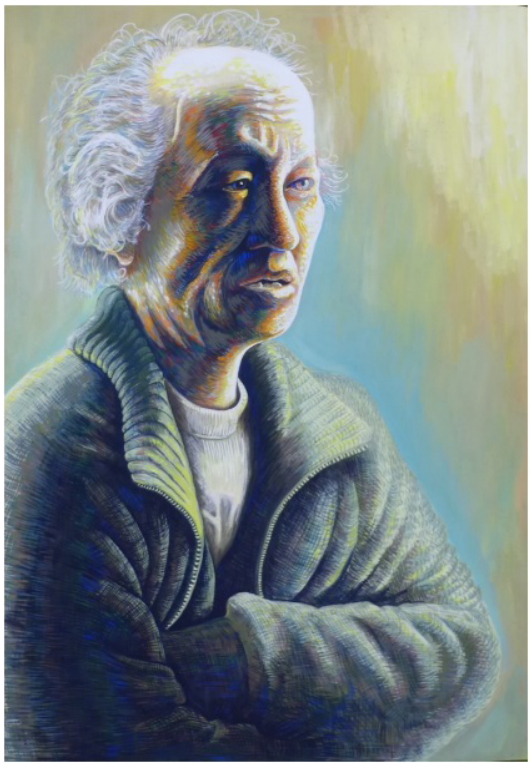
※表紙掲載作品

銀　賞

「湯治場」
　秋田刑務所　Ｉ・Ｓ
選評　遠景の扱いが素晴らしい。湯が流れ込む様など良く描けています。

「瓶のある風景」
　盛岡少年刑務所　Ｓ・Ｋ
選評　大変繊細な色感を持ち、みごとに石や瓶を描きあげています。

銅　賞



「男性」
山形刑務所　翠小灰
選評　人生を感じさせる顔の表情。多くの色彩を自由に駆使して素晴らしい。

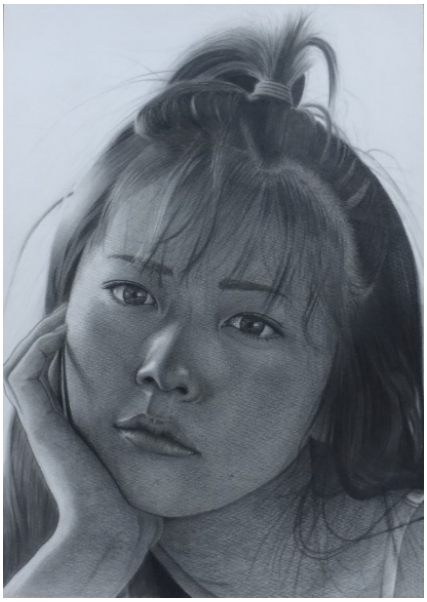
「既報」
福島刑務所　W・G
選評　生活の中の情景が描き出された好ましい絵。それぞれの人物の表情も良い。

「バリニーズ　ヴィラ・リゾート」
福島刑務支所　O・C
選評　透明水彩の扱いが良く、やさしい色彩で描かれた情景が美しい。

佳　作

「湖畔の街」
宮城刑務所　W・M

「山形市馬見ヶ崎さくらライン」
山形刑務所　M・M



「笑顔の手前で」
山形刑務所　M・K

「無題」
青森刑務所　U・M

「船」
宮城刑務所　M・K

《 ポスター・カレンダー 》

金　賞

「ＳＴＯＰ！飲酒運転」

山形刑務所　翠小灰

選評　素晴らしいレタリングです。絵もポスターらしく整理され好感が持てます。

銀　賞

「サンタクロース村」
　福島刑務支所　Ｅ・Ｍ
選評　丁寧な作品づくりが好ましい。
　　１２月の季節が表現されています。

銅　賞

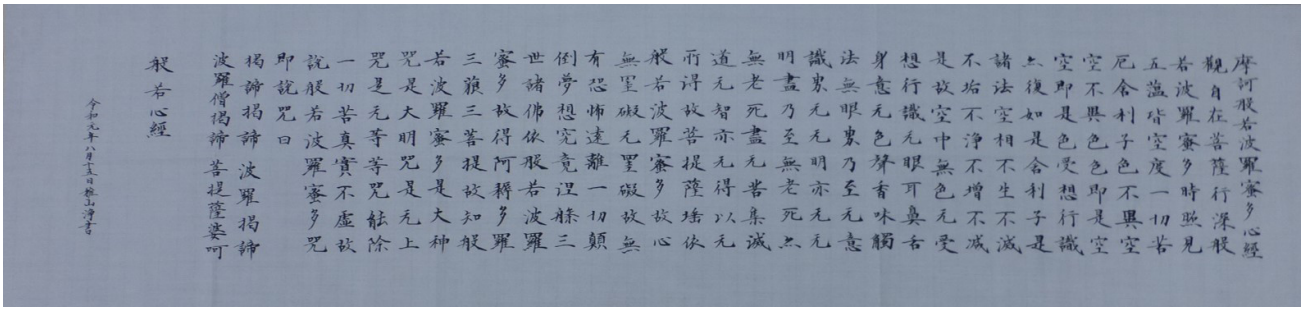
「鬼若丸の巨鯉退治」
　山形刑務所　Ｍ・Ｎ
選評　カレンダーとして、レタリング・図柄共に良い。５月の文字がどこかに欲しいです。

佳　作

「未来」
　宮城刑務所　龍雲
選評　やわらかな色彩と絵で未来を感じさせているのが良いです。

《 毛 筆 》

金　賞

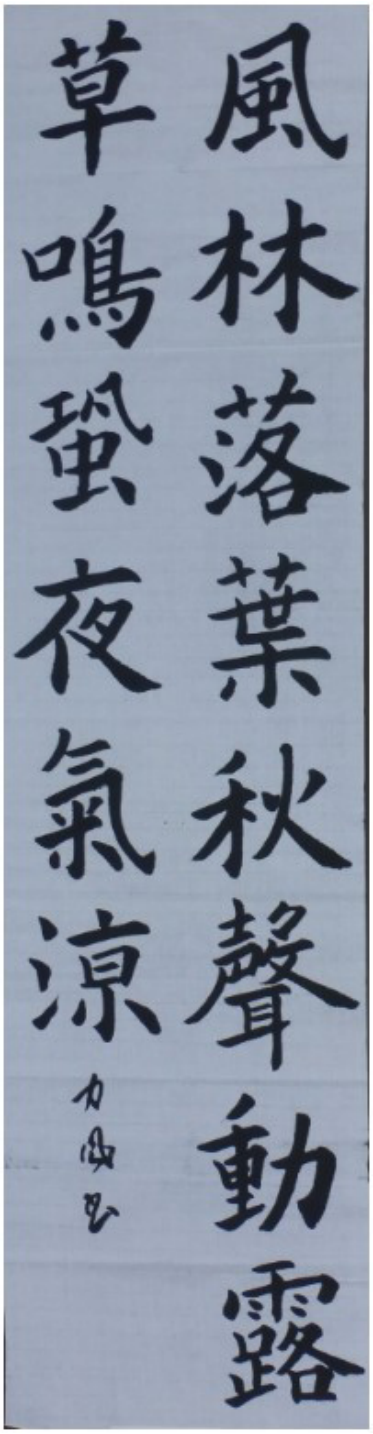

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般
若波羅蜜多時照見
五蘊皆空度一切苦
厄舍利子色不異空
空不異色色即是空
空即是色受想行識
亦復如是舍利子是
諸法空相不生不滅
不垢不淨不增不減
是故空中無色无受
想行識无眼耳鼻舌
身意无色聲香味觸
法無眼界乃至无意
識界无无明亦无无
明盡乃至無老死亦
無老死盡无苦集滅
道无智亦无得以无
所得故菩提薩埵依
般若波羅蜜多故心
無罣礙无罣礙故無
有恐怖遠離一切顛
倒夢想究竟涅槃三
世諸佛依般若波羅
蜜多故得阿耨多羅
三藐三菩提故知般
若波羅蜜多是大神
咒是大明咒是无上
咒是无等等咒能除
一切苦真實不虛故
說般若波羅蜜多咒
即說咒曰
揭諦揭諦 波羅揭諦
波羅僧揭諦 菩提薩婆呵
般若心經
令和元年八月五日 雅山書

「般若心経」

山形刑務所　雅山

選評　写経を心得ており、高い技術の作品

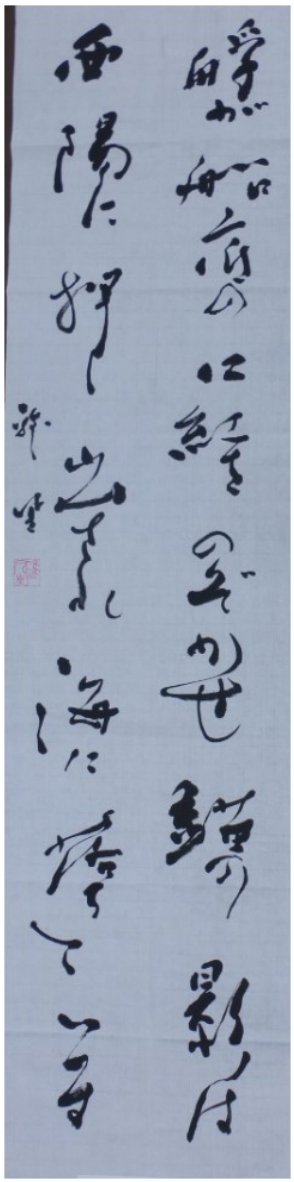
銀　賞

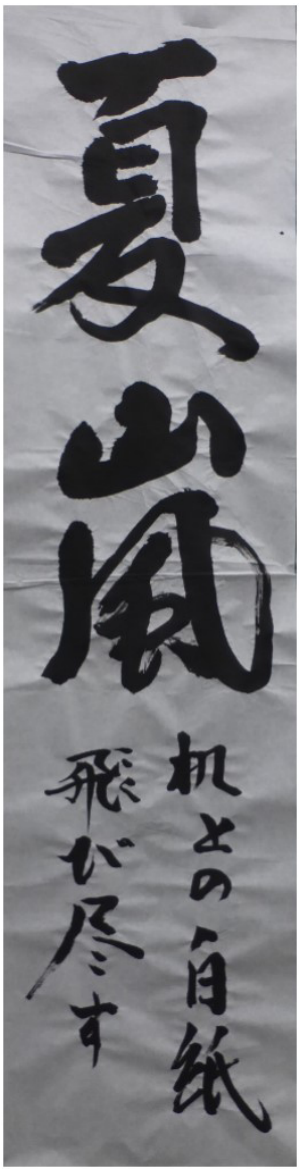


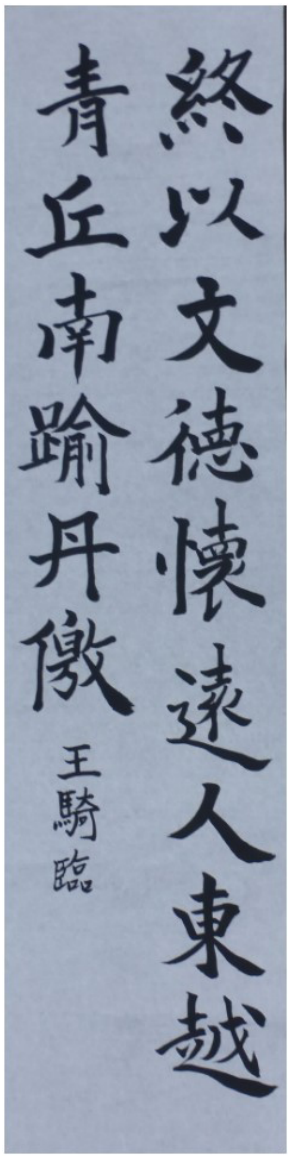
「呉寛詩」
宮城刑務所　力風
選評　楷書の基本を習得しており筆技の高い作品

「松樹千年翠」
盛岡少年刑務所　Ｉ・Ｍ
選評　力強く堂々としている。

銅　賞





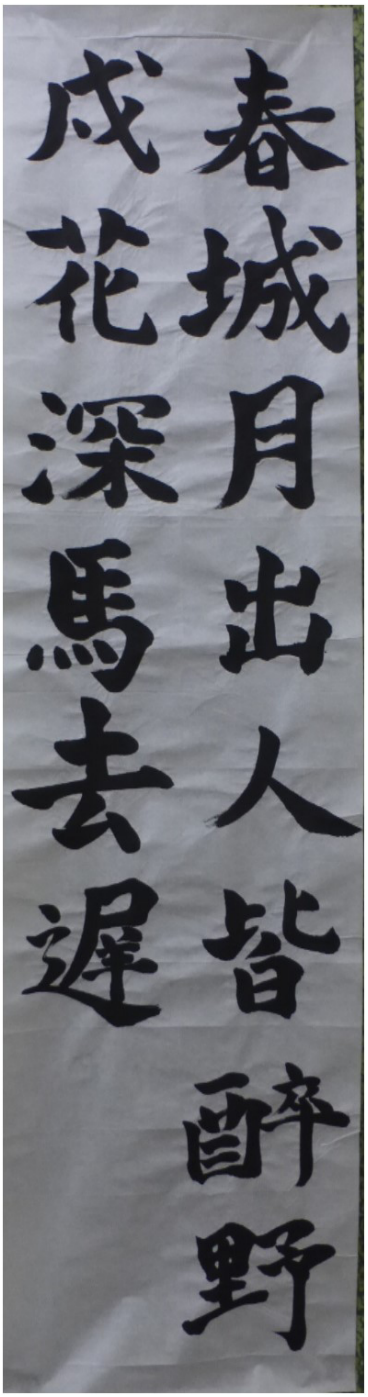


「自詠詩文」
宮城刑務所　雅凰
選評　自らの詩を書作での表現、素晴らしい。

「正岡子規の句より」
盛岡少年刑務所　N・M
選評　大胆な筆致で構成も面白い。

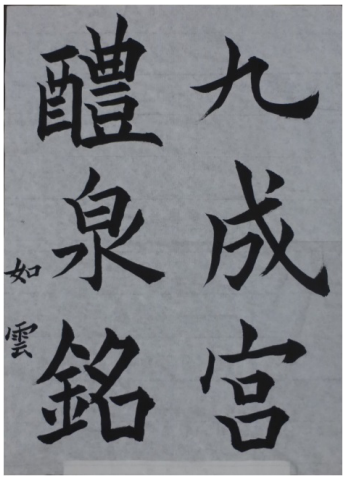
「終以文徳懐遠人・・・」
青森刑務所　I・J（王騎）
選評　ゆったりとした筆遣いで伸びやかな作

佳　作

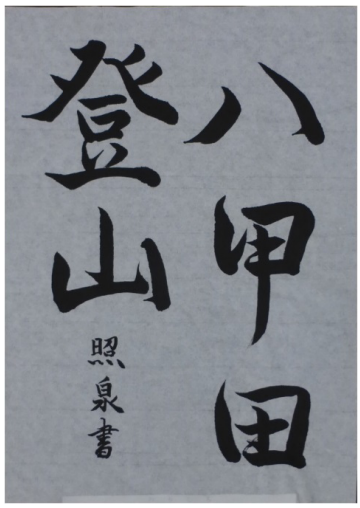


「春城」
秋田刑務所　M・T

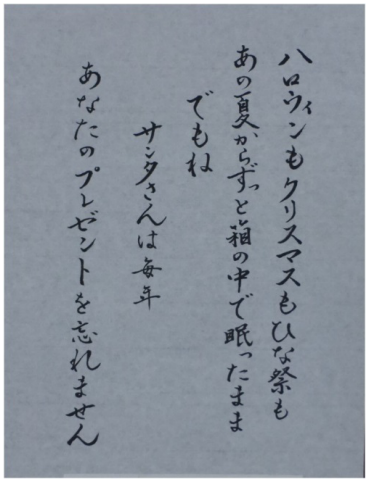
「虎」
福島刑務所　A・F



「九成宮醴泉銘」
山形刑務所　如雲



「八甲田登山」
青森刑務所　W・T（照泉）



「亡き貴方のために」
福島刑務支所　S・S

《 硬 筆 》

金　賞

幸福へのカギ

やっていることをつらいと思いながらいやいややるか、つらいと思えることでも楽しくやるかは、自分の考え方の問題。

「やると決めたら楽しむ」が、幸福へのカギ。

「幸福へのカギ」

福島刑務支所　M・M

選評　一字一字丁寧に書いている。書者の思いが伝わる。

銀　賞

一握の砂　石川啄木

頬につたふなみだのごわず
一握の砂を示しし人を忘れず
たわむれに母を背負ひて
そのあまりの軽きに
泣きて三歩あゆまず
はたらけど猶わが生活
楽にならざり
ぢっと手を見る

「一握の砂」
宮城刑務所　白蘭
選評　全体の構成を考えながらしっかりと書いている。

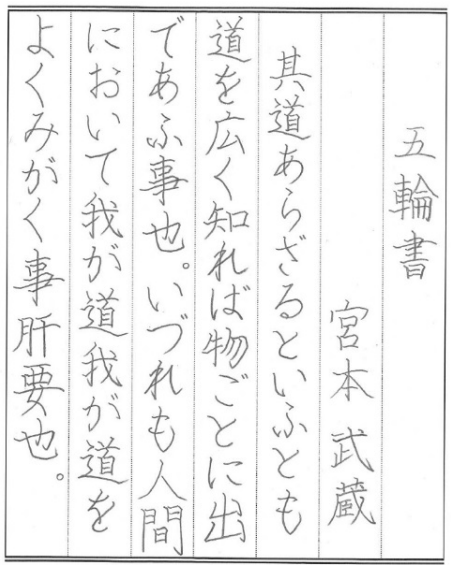
銅　賞

いいこと
相田みつを

いいことは
おかげさま
わるいことは
みからでたさび

「いいこと」
青森刑務所　Ｉ・Ｙ（不退転）
選評　字の形を大切にしながら慎重に書いている。

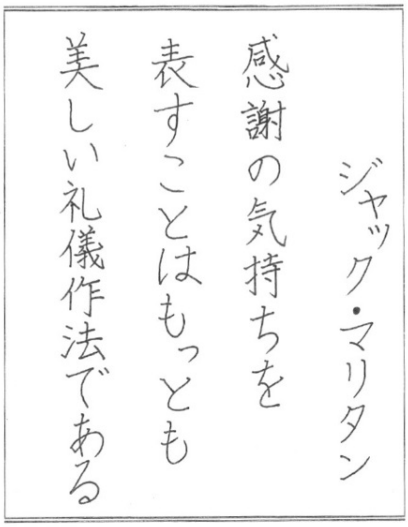
佳　作


五輪書

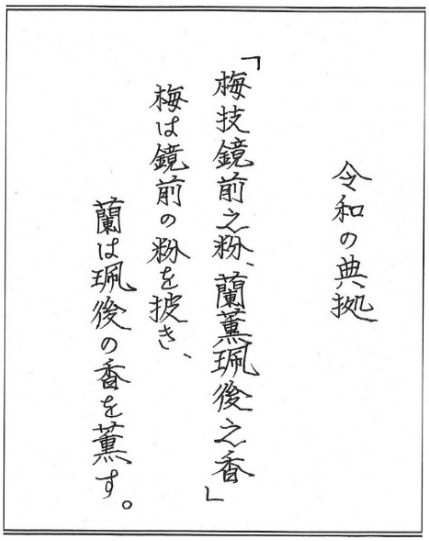
宮本武蔵

其道あらざるといふとも
道を広く知れば物ごとに出
であふ事也。いづれも人間
において我が道我が道を
よくみがく事肝要也。

「五輪書」
山形刑務所　寒卯


ジャック・マリタン

感謝の気持ちを
表すことはもっとも
美しい礼儀作法である


令和の典拠

「梅枝鏡前之粉、蘭薫珮後之香」
梅は鏡前の粉を披き、
蘭は珮後の香を薫す。

「令和の典拠」
秋田刑務所　K・K

「ジャック・マリタン」
盛岡少年刑務所　I・K

書画部門審査総評

【絵画】

絵画には、独自性が必要です。その様な観点から、作品の賞を選ばせて頂きました。どの作品も丁寧さがあり、感心します。選外の作品の中にも心ひかれるものも多く、今回は残念でも次の機会に、また挑戦して下さい。絵は、自分自身の心の自由が存在する時間と空間です。

宮城県芸術協会運営委員
鈴木智枝

【ポスター・カレンダー】

成人の部のポスター・カレンダーは、どれも良く描かれていました。選外の作品にも良いものが多く、嬉しいことです。文字の美しさ、絵柄の確かさ、単純化、アピール性の大きいもの等、カレンダーやポスターの役目を満たしているものを選びました。

宮城県芸術協会運営委員
鈴木智枝

【毛筆】

出品点数も多く熱心に取り組んでいる様子が窺われた。条幅作品の中にはかなり高度な作品が見られた。古典の臨書作品など基本的なものから書を学んでおり、大変嬉しく感じられました。

東北書道会副会長
鈴木霽月

【硬筆】

平成から令和の時代に変わり、新たな気持を作品で表現しようと思われているのか「令」の文字が入った作品が多く見られた。文字を正しく、美しく書くという事に皆さんが熱心に取り組んでいる様子が感じられました。

東北書道会副会長
鈴木霽月